# 新旧両世代のパフォーマー達の行為に見た、消費に回収されないアクションアートの可能性。

REVIEW

**「ゼロ次元以降のアクションアート」**
**11月18日～19日　都電荒川線車内**

パフォーマンスアートや既存の発表・流通経路に収まりきれない現代美術を紹介してきたアウトラウンジは2006年11月20日で閉鎖した。その終幕を飾るイベントのひとつが「ゼロ次元以後のアクションアート」で、11月18日（土）と19日（日）の両日にかけて、都電荒川線の走行中の車両を貸し切りにしてパフォーマーが入れ替わり立ち替わりで"上演"を行った。ありそうでなかった企画で、実現させた主催者・田上真知子に拍手を送りたい。

このゼロ次元とは、60年代前半から加藤好弘と岩田信市を中心に「儀式」と呼ばれる過激な身体（しばしば裸体）表現を行った集団。かれらは既存の日本の美術や欧米の現代美術の動向とは一線を画した、自生的な表現を目指した。60年代末には万博破壊共闘派を生み出す母胎となり、多数の逮捕者を出し、終息へと向かった。ゼロ次元を謳っているのは、戦後のメインストリームとは一線を画する表現を紹介したいという意識の現れであろう。ここでは私が観覧した初日のみを報告する。

まずトップバッターはメディア批評家の粉川哲夫。彼は自由ラジオの活動と共に、ラジオを使ったパフォーマンスも知られている。彼は体を動かすことで生まれる微細な音をマイクロフォンで拾い、それを電波で発信。脇に置いたラジカセで受信して拡大した。身体表現は純粋に視覚芸術だが、体の擦過音を拾うことで聴覚へと変換されている。これをさらにラジオというフィルターで通すのは、ものごとの認識とは二次的で不確定であることを示すものだろう。マイクロフォンで音を拾うのはサウンドアートでよく使われる手法だが、都電というローテクの交通手段とラジオがマッチし、楽しめた。

川端希満子

荒井真一

丹羽良徳は2つのゴミ袋を持ち込み、その中身を入れ替えていく作品。彼が立ち去った後のゴミの汚水は勘弁して欲しかった。川端希満子はユーモラスな形で性を表現することで知られるパフォーマー。男性器のサイズを計ってみせるおなじみの手法の脇で、象（と犬など）のおもちゃが動き回るさまは面白かった。尾崎旬は体育会系の格好で現れ、服を脱いでいくたびにやはり体育会系の標語が見えてくるという趣向。今風のコミカルなパフォーマンスの潮流を象徴する作家と言えるだろうが、これを面白く感じるか否かは趣味の問題か。山岡佐紀子は身体の微妙な感覚や違和を、顔などにくっつけたミニマルな手の動きで表現。薄暗い密室の中だと違うのかもしれないが、少なくとも都電というシチュエーションを生かしていないように思われた。

次のゼロ次元は後述。荒井真一は社会的な題材を扱うことで知られるが、今回は「ありがとう！美術手帖」と言うたびに60年代あたりの「美術手帖」を引きちぎり、ほおばっていく作品だった。決して呑み込まず、また吐き出さないところがポイント。当然作家は息苦しくなり、顔は真っ赤になっていく。そんな中で連呼する「ありがとう！美術手帖」には迫力があった。昔彼の個展が同誌に紹介されたとき、「これでイケる！」と確信したそうだが、世の中はそんなに甘くはない。ここには美術作家に共通する「恨み」のような情念が漂っている。終幕になって、彼の足下にヨシダ・ヨシエ連載「戦後前衛所縁の荒事十八番」の頁があったのは偶然と言うにはできすぎか。

さて、表題にもあったゼロ次元である。若い女性がまずはやりのメイドの格好で現れ、次に半裸になって床をはいずり回る。だが後半は写真家が群がり、あたかもAVの撮影会のようであった。かつてのゼロ次元には近代に抗するむきだしの野蛮としての裸があったはずだが、今回の若い女性の裸身にそうしたインパクトはなく、ちまたに氾濫するエロスの感覚しか残らない。性の商品化が進行した現代では、裸体にも強靱な意志と精神が必要とされるのだ。おそらく60年代をいまだに核に持つ加藤好弘と若いスタッフの意識の間には相当なズレがあるのではないか。それを克服するには、辺境の野蛮な男の肉体を引っ張ってくるか、性の商品化を越えるコンセプトを創出しなければなるまい。

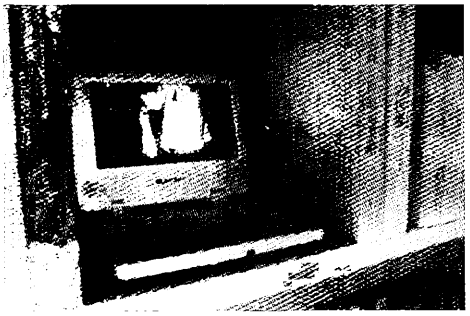
ここで表題の「ゼロ次元以後のアクションアート」に戻る。はからずも新旧両世代の意識のズレがかいま見えた。加藤は若い世代の社会的視点の不在を嘆いていたが、それも時代の流れだろうか。旧世代の粉川には洗練された手法論が生きているが、たとえば尾崎や山岡には極私的な感覚を感じる。そんな中で、川端の戦略性と荒井の回収されない荒ぶる肉体が印象に残った。アクションアートが一過性のものとならないためには、そんなアプローチが必要とされているのだろう。

（アライ＝ヒロユキ／美術・社会批評、パフォーマンス）

粉川哲夫

ゼロ次元　撮影／直片平ひろと（4点とも）

## IN TOWN　部屋の記憶



●そこは古書店というよりは、マンションの一部屋に本がたくさん詰まっている、という場所だった。広尾のはずれにある「古書一路」。小説や評論、美術関連のハードカバーの本が整然と並ぶ中に、ひっそりとモニターが置かれている。カトウチカ「Pain Flower」は、弾ける花火の映像が白い服を着た女性に投影されているようすを撮影したものだ。押しやるような手のしぐさ、絶えず動く女性の身体、そこに花火は弾ける。音がないことで、花火の「ばぁぁん」と弾ける音を思い出し、衣服のこすれる音も想像する。本のページをめくるタイミングのように、画面は数十秒単位で切り替わる。スペースの奥、本棚が行き詰ったところの壁には、滝が流れているように上から下へ白い液体が流れる映像が流れている。小さな古書店の本当に奥なので、とてもひっそりしている雰囲気は、禊を行うための滝のようにも見える。とめどなく流れるさまに、ふと見入ってしまう。他にもいくつか作品があったが、古書店（というより本好きな人の部屋に迷い込んだ感じ）とカトウチカの作品（というより自分の記憶や想像を試されているような感じ）の一見異質なコラボレーションが、不思議となじんでおり、あたかも自然にあったように感じさせるぬくもりが、そこにはあった。（藤田千彩）

カットイン Vol.56 2006年12月号　発行／タイニイアリス　ディ・プラッツ　アート・ネットワーク・ジャパン　編集／井上二郎＋小笠原幸介　090-5391-0588　kousukeogasawara@mail.goo.ne.jp　DTP／ORANGE, OGA

# 作品制作における「場」の役割とは？ スペース運営の理想と現状が語られた。

**『オルタナティブ・スペースとは何か？』**
**10月20日　大塚out-lounge**

去る10月20日、ビル解体の為閉店する大塚のアートスペース、out-loungeの最後の企画として、「オルタナティブ・スペースとは何か？」と題した座談会が行われた。出席者は、経堂appel（現在は閉店）の高橋辰夫氏、銀座で画廊exhibit Live & Morisを開いている森邦彦氏、武蔵小金井アートランドの佐久間久美子氏、中野RAFTの来住真太氏、300日画廊の運営を行い、現在も茅場町Gallery ≠ Galleryなどの運営をしている佐藤洋一氏に、out-loungeの小屋主田上真知子氏、司会に富士栄秀也氏という面々。

最初は出席者が順に、自分の活動の経緯や現状を話していった。森氏は、銀座に現代美術を紹介する画廊を開いた草分けの方。過去の経験談から現在の経済的な問題に至る多くのお話を、独特の語り口で語ってくれた。来住氏は、RAFTが公的な援助を受けているNPO法人だという話。海外では、いろいろな文化事業に公的な援助が行われてるという話はよく聞くのだが、日本では、公的な援助のあり方がまだはっきりしないのが現状だろう。これは、今後、自主スペースの運営で、ひとつの問題になっていくのではないかと思えた。最後の佐藤氏は、従来の展示期間の問題点から自身のギャラリーでは初日を土曜にしているというお話など、美術スペースの運営に関わる詳細な話をされた。美術界の現状や問題点がまた一段明確になったし、氏の美術に対する愛情や誠意ある姿勢がよく伝わってきたお話だった。

その後、出席者によるディスカッション形式で、座談会は進行したが、やはり中心は美術関連の事柄。ギャラリーの運営にかかる費用をどう捻出するかで、森氏からは、いっそギャラリーの入場を有料にしてはどうか、という過激な意見まで出た。氏の、作品を見る人もある程度の責任を負うべきで、そのためにはいくらかお金を払ってもいいのではないか、という意見は、個人的には頷けるものだった。また、田上さんがout-loungeを始めた理由の一つにも、ギャラリーを借りて展示をするには、かなりの金額を払うことになるので、それなら自分で家賃を払って始めてしまったほうがいいと思った、という話にはなるほどと思わされたりもした。

それから、この座談会のタイトルにもなっている「オルタナティヴ・スペース」に関する話に。"alternative"という語は、もともと「二者択一の」とか「もう一方の」という意味の語だが、"主流ではない"という意味もあることから、前衛的な演劇、美術や90年代ロック音楽の一派をさす用語として使われてきた言葉。この言葉を鍵にして、出席者が今後の方向性について語るという展開に。しかし、統一した見解が出てくるというよりは、各々が自分の立場で重要な事柄を述べている印象だった。

聞きながら思い出していたのは、以前岸野雄一氏が言っていた、現在のシーンの描写のこと。現在では、単に新しい、古いといったような一直線的な進歩観は既になく、様々なムーヴメントが、点在する島のようにあり、その島の中でのみ通用する価値観が深められていっている。そしてその島々の間で、つながったり切れたりという運動が時折ありはするが、全体を俯瞰する動きは出にくい、と岸野氏は言う。この現状認識は非常に的確だと思う。

そのような状況の中で、「オルタナティヴとは何か」ということも個人の問題に帰する部分が大きくなっているのではないか。中には、それでも「進化論」的なものを無理にでも読み取ろうとする人たちもいる。しかし、実際現場で製作にあたっている者は、その時々に自分の実感（「腑に落ちる」感覚、とでも言おうか）に従ってやっていくしか方法はないはずだ。この日も、結論らしきものは出ず、出席者それぞれが自らの姿勢を確認して終わったのも当然なのかもしれない。

非常に面白く興味深い座談会だったと思う。だが欲を言えば、美術方面に話が偏りすぎ、音楽、ダンスなど他の分野の話ももっと聞きたかった気がする。アートランドの佐久間さんに、もっと発言してほしかった。美術以外の分野という意味では、高橋さんの、美術の作家は音楽の人と比べると孤独なことが多い、音楽の人は対バンがあるから人とのつながりができ易い、という話が面白かった。それなら、美術の人も「対バン」すればいいのではないか。それこそ、プロデューサーの腕の見せ所、作家のいい組み合わせを考えて合同展を企画する人がどんどん出てきていいのでは。最近、音楽家杉本拓、宇波拓らと美術アーチスト角田俊也の交流や、蛍光管をノイズ発生器にしたOPTRUMで演奏活動する伊東篤宏、ドラマー一楽儀光による演奏×ビデオインスタレーション（？）の「ドラびでお」など、美術と音楽にまたがる活動が活発化している現状もある。もっと様々な「島」をつなげる試みがあっていいはずだ。

座談会のあと、個人的に話したときに出た高橋さんの発言だが、「島」がつながり、お互いの「島」で深まった価値観が融合するとき、"全ての「島」を貫くような、新たなパラダイムが出現する可能性もありえる"はず。そのような時、それが起きる「場」の役割は非常に重要なものになるだろう。

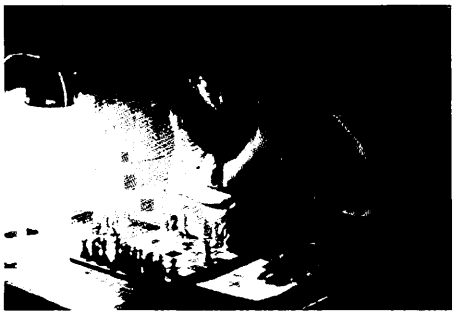
（米本篤／ヴォイスその他の即興演奏）



# 贅肉をそぎ落とした見事な会話劇の中に再発見した、言葉の魅力。

**パラドックス定数『Nf3Nf6』**
**11月30日～12月3日　中野planB**

「パラドックス定数」という奇妙な劇団名と『Nf3Nf6』という作品名、チェスという題材に惹かれて観に行ったこの作品は、私の予想に反し、いたってシンプルな俳優二人による会話劇だった。しかしこの会話の見事さに釘付けになってしまったのである。舞台はとある収容施設の中にある、一人の将校の部屋。将校は無理矢理連れて来た囚人に、自分とチェスをさすことを命じる。実は2人は大学で数学を学びあった優秀な学友同士であったが、一人は国のため軍人になる道を選び、一人は敵軍のスパイとして活動し、囚われの身になっている。旧友を処刑から救おうとする将校とそれを拒否する囚人。皮肉な運命に翻弄され、だがそれでも人間的であろうとする二人の人間の微妙な心理が、チェスの盤を挟んだ会話として描かれる。その会話は決して感情むき出しのものではなく、チェスのルールや、二人が青春をかけた数学の理論のメタファーに彩られた知的なものだ。「仮定」「確率」などの数学用語、抽象的で概念的な言葉の背後にひた隠しにされた、お互いへの思いに胸を打たれる。自らを否定すると同時に肯定し、相手を罵ると同時に思いやり、疑うと同時に信じ、数学を愛すると同時に呪う…。相反する感情に満ちた言葉の何と美しいことか。そして何と機知に富んだやり取りなのだろうと思った。だが、この会話はうまく出来すぎている。そのあまりに完璧なやり取りに、この言葉は生活の中の言葉ではなく、戯曲として書かれた言葉なのだと感じられてくるのだ。それでもこの「完璧に書かれた言葉」が全く嘘くさく聞こえないのは、役者の演技の素晴らしさのためであろう。抑制が利いた…という言葉では足りないほど余計な動きや抑揚をそぎ落とし、話される台詞は、説得力がある。声をはっている訳でもなく、淡々と話しているのだが、この言葉はとても聞きやすく、すっと観客に伝わるのだ。動きも表情もいわゆる芝居じみたものではなく、チェスの駒を動かし、壁に数式を書き付けるといった動きしかない。会話は急激な展開も、結論めいた出口も無く、終わる。会話の内容から、この話がナチスドイツの収容所での出来事だ、と途中で気づくが、最小限の舞台要素と冷徹な美しさをもった言葉が、これを単なるお涙頂戴の悲劇にさせないのだ。そしてもう一つ会場の持つ雰囲気が、これ以上無いほど有効な演出になっていたのが印象的だった。特にビルのテナントの配水が流れる音がかすかに聞こえるplan Bというコンクリート打ちっぱなしの地下室での「静寂」は何よりも雄弁に語っているように感じた。



撮影／渡辺竜太（3点とも）

そしてやはり言葉の力。演劇は音楽やダンスのように、抽象的に、そして直接的に感覚に訴える力は弱いかもしれない。言葉を使わず、より身体的に表現をしていくという方向もあるが、言葉に新しい視点を見いだし、そこから何か表現をしていくという方向もあるだろう。パラドックス定数の今回の作品は後者の方に可能性を見いだそうとしているようだ。数学やチェス、暗号をめぐる言説は、生身の人間が発する身体的な「言葉」でありながら、論理性と抽象性を同時に持つ魅惑的な存在だ。劇作家は、これらのモチーフに硬質な言葉の魅力を発見したのだろう。忘れがたい余韻を残す作品であった。

（小笠原幸介）

# アリスフェス'06、注目のラインナップを紹介!

アジア各都市をネットワークで繋ぐ新宿の小劇場
**TINY ALICE** より最新ニュース

**Riverbed Theater**
**(fromシカゴ+台北)vs**
**劇団態変 金満里ソロ公演**
**(from大阪)**
**12月26日(火)〜30日(土)**

ALICE FES 2006

12月26日(火) 19:00〜 月下咆哮
12月27日(水) 19:00〜 月下&雲になった男
12月28日(木) 19:00〜 月下&雲になった男
12月29日(金) 19:00〜 月下&雲になった男
12月30日(土) 15:00〜 月下&雲になった男

「雲になった男—The Man who became a Cloud」
☆演出=Craig Quintero
☆出演= Huang Hsu-yuan Chung Li-mei Wei Hsiao-chun Hsu Yi-ting ☆装置/制作= Lu Chung-chen ☆照明= Ou Yang-gu
「月下咆哮」
☆監修=大野慶人 ☆出演=金満里
➡シカゴ出身のアメリカ人演出家。教鞭をとるかたわら、潜在意識の深層を動く絵にして台北のオルタナティブ演劇界一、二を争うクレイグと、重度の身体障害を特権的肉体へと逆転、大野一雄の舞踏に衝撃を受け自身の内部の"女"性肯定へと踏み出した金満里と—いずれも世界の静かな、しかし熱い注目を浴びる二人の連続競演。
「雲になった男」は、シュール画家レネ・マグリット、その青春のトラウマを追跡するイメージ演劇。「月下咆哮(ホウコウ)」は「ウリオモニ」(1999)に続く金満里のソロ第2作。「生々しい烈しさから出発した金」がいま「魂の優しい語りかけで私の心を打つ」と大野慶人氏は言う。まったく異なる二つの方法が今、国境を越えて激突! 競い合う。

左…金満里
右…Riverbed theatre

**劇団きらら(from熊本)**
**『いちじく純情』**
**1月13日(土)〜14日(日)**

ALICE FES 2006

1月13日(土) 15:00〜 19:30〜
1月14日(日) 13:00〜
☆作・演出=池田美樹
☆出演=豊永英憲 宗真樹子 オニムラルミ 池田美樹 他
☆問い合わせ=Tel&Fax:096-346-3437
E-mail:kirara@s8.kcn-tv.ne.jp
Web:http://www.gkirara.com/
➡いつかはファイト一発! 旅に出るとか 土曜日にケーキを焼くママになるとか 漠然と、でもしっかと思っていたのに いつしか「その旬」は通り過ぎていて。 えええええ?? 見回せば、周囲もたいしたドラマ起きぬままボケたり、死んだり、嫌われたり。 えええええ?? 「いつかはきっと」の仮想のうちに、身は勝手に熟し熟れていた 焦るぜ、純情! —いちじくの美樹は唇噛んでいた。火の国・熊本から4度目の東京公演。数脚のキャリアで"遊び"ながら「物語」る、きらら独特のスタイルでお届けします。未見の方もぜひご来場を! —と、これまた美樹は呟いていた。

*ALICE FESTIVAL 2006*

# 東京国際芸術祭2007開催。新たな挑戦も取り込んだフェスティバルの方向性とは。

芸術文化を支援、発信するNPO
**アートネットワーク・ジャパン** より
**MONTHLY LETTER Vol.35**

国際的な舞台芸術のフェスティバル「東京国際芸術祭」の季節が今年もやってくる。今まで紹介されることの無かった中東諸国の作品の招聘、地方で活動する劇団の公演を東京で上演するリージョナルシアター・シリーズ等、特色あるプログラムを通じ、日本の演劇界に問題提起を行ってきたこのフェスティバル。2007年のプログラムにはどのような意図があるのだろうか。ディレクター市村作知雄氏のコメントを掲載する。

■東京国際芸術祭2007開催にあたって
東京国際芸術祭ディレクター/市村作知雄

東京国際芸術祭を開催するにあたり、日本社会にいることで知らずに入り込む不思議な先入観をぬぐい去ることを重要な手続きと課してきました。それはなかなか困難なことで、ぬぐい去ると同時に妥協する、つまり「落としどころを見つける」という妙な習慣を無視しては残念ながらこのフェスティバルも存続させることはできません。今回のフェスティバルはまさに存続させることを最大のテーマとしているといえます。

アジアでは、古くから香港、シンガポール、最近は上海、ソウルで大きなアートフェスティバルが開催されています。東京には、フェスティバルは必要ないのでしょうか。東京国際芸術祭は、NPO法人アートネットワーク・ジャパンという小さな民間非営利組織がすべての責任をもって運営しています。国や地方自治体、企業の恒常的な大きな助けなくしてはもう先に進むことはできません。東京国際芸術祭2007は、それを訴えるために開催するといっても過言ではありません。

長い間東京国際芸術祭の核をつくって来たリージョナルシアター・シリーズ(財団法人地域創造共催)は今回から大きく模様替えしました。リーディングとプロデュース公演を軸にしながら、地域の各演出家にアドバイスをする一線の演劇人を配置するという新しい取り組みに着手しました。国際交流基金と共催してきた中東シリーズは今回で4回目となりますが、ひとまずこれが最終回で、これからはなんらかの形での継続を模索することになります。この中東シリーズにより東京国際芸術祭はアラブ圏と強いネットワークをつくることができました。

アメリカ戯曲のリーディングは2回目となり、少しずつ進化すると思われます。先進国の演劇の大きなテーマとして「ジェンダー」があることは明確ではありますが、今回はもう少し多様な戯曲が登場することを期待しています。

日本の演劇は、私たちの運営する「にしすがも創造舎」のレジデント・アーティストである倉迫康史氏、阿部初美氏、高山明氏のものをプロデュースすることにしました。稽古場のあり方、ドラマトゥルクの意義などいくつかの問題意識を共有しながらの演劇づくりとなります。

さて、東京国際芸術祭2007には、ベケット生誕100年を記念して結成された実行委員会(代表扇田昭彦氏)が主催する公演が組み込まれています。現代演劇の大きな柱であるベケットを讃える行事は世界各地で開催されています。私たちも同様の考えで、むしろ東京国際芸術祭2007はベケットに捧げられているといってもよいでしょう。特にアイルランドからドルイド・シアター・カンパニーを招聘します。またベケットがラジオドラマとして書いた戯曲を再現し、公開収録するとともに、ネットラジオにて配信するなどの計画が盛り込まれています。

このように東京国際芸術祭2007は少し複雑な組み立てになっていますが、その理由を明らかにするには残念ながらもう少し時間が必要というほかありません。

**東京国際芸術祭2007**
**詳細… http://tif.anj.or.jp**

主催: ANJ A-ts Network Japan
共催: 社団法人国際演劇協会(ITI/UNESCO)日本センター
事業共催: APA(芸術振興協会) JAPAN FOUNDATION 国際交流基金
財団法人 地域創造
特別協賛: Asahi アサヒビール株式会社
協賛: SHISEIDO トヨタ自動車株式会社 Panasonic
助成: Asahi アサヒビール芸術文化財団
後援: 外務省 東京都 豊島区
社団法人日本芸能実演家団体協議会
協力: シアターガイド シアター・テレビジョン
宣伝協力: 株式会社ポスターハリス・カンパニー

写真…左より
●『アトミック・サバイバー』©佐藤慎也
●リージョナルシアター・シリーズ『浮力』©原田直樹(n:foto)
●『ラビア・ムルエ(レバノン)新作・世界初演』
●ドルイド・シアター・カンパニー『西の国のプレイボーイ』
©Keith Pattison

# 己の肉体と真摯に向き合うということ。

■舞踏―極私空間 吉本大輔舞踏公演'06
『エロスとタナトス』 @麻布die pratze
12/22(金)&12/23(土)19:30 12/24(日)
16:30 前売¥3000 当日¥3500
問=044-932-2039(舞踏極私空間)
☆原作=スタニスラフ・ドゥ・ガラ咀嚼公夫人
☆出演=吉本大輔

**ポーランドの新聞『ガゼータ』2006年10月6日付ルブリン地方版文化欄より**

「日本から来たカメレオン」(見出し)

[要約小文は省略されている]

昨日、吉本大輔が「エロスとタナトス」という舞踏公演を行なった。その公演は熱狂的なまでの好評をもって観客に迎えられた。

舞踏とは、人間の中に潜む原始的な力と関係しつつ、暗闇の中で演じられるある種の秘儀である。舞踏家にとっては肉体そのものが劇場であり、肉体は精神と一体をなしているのである。舞踏はこの一体をなしているものの表現であり、単に伝達や振付や記号を現実化するものではないのである。

肉体は単に道具として使われているというよりは、想像を絶するほどのレベルに統御されている。舞踏について書かれた古典的な評論において「舞踏は踊るものではなく、踊らされるものである」と言われているのも、宜なるかなと言えよう。

舞台の吉本はさながら変幻自在のカメレオンのようであり、この動物が舞踏家の魂を操る様々な獣たちを体現しているかのようであった。

この公演では、舞踏家の肉体のみならず、照明も、そして音楽も重要な役割を担っている。照明は肉体の変容の様子をよりいっそう効果的に見せてくれたし、音楽は想像力を掻き立ててくれた。

いくつもの場面の終わりに、舞踏家が頭を下げたまゆっくりと観客に向かって歩んでいったとき、その肉体は驚くべき絵画のような多彩さで語りかけたのだった。背中は頭部にのめり込んで、顔面は在るか無きかに見え隠れした。

実際に何が起こったのか、われわれは何を目撃したのか、それを述べることは困難である。我々は時に謎めいてはいるが風変わりな手がかりを掴むことがある。というのも、舞踏家の陰影はある時は女性のイメージを形作るし、また別の時には男性のイメージを形作るからである。

しかしながら、同時にまた我々はこの「エロスとタナトス」という題名にあるように相対立する二つの力の戦いを観ているようにも感じるのである。すなわち、相対立しつつも本質的には共存しうる二つの力の戦ひを、である。それらは舞踏家の肉体と表情の中に、そして周囲のすべてにも、確かに共存していたのである。

グジェゴシュ・ヨゼフチュク記者[和訳:那岐一堯]

(撮影/鬼海弘雄)

## 新しい演劇を発信する神楽坂と麻布の小劇場 DIE PRATZE より最新ニュース

**ダンスがみたい!「新人シリーズ5」開幕!!**
**2007年1月6日~1月21日 19:30開演**
**チケット料金など詳細は**
**http://geocities.jp/azabubu/を参照**

『始めての作品を踊るときは、いつも新人の気持ちだし、実際新人なんです。』

ラララ・ヒューマンステップスで世界中に名を馳せたルイーズ・ルカバリエが退団後初めて来日する際に話してくれた言葉だ。

どれほど多くの舞台を踏んでいようが、多くの人の賞賛を浴びていようが、新作を始める時は「新人」よ、という言葉には謙虚さはもちろん、未知の世界への飽くなき探究心とその地に踏み出す際の期待感が感じられる。翻って自分のことを考えると新たな言語を学び始めたとき、もう一度生まれ直したような新鮮な気持ちになったのを思い出す。

今回のディ・プラッツの「新人シリーズ」でも、様々なタイプの新人がいる。ダンスで舞台を踏むこと自体新人の人、己の体と向き合い一人勝負にかけることに新人な人、ディ・プラッツという場所そのものに新人な人、様々だ。 それぞれのドキドキとワクワクを、こちらも受け止めて、新たな瞬間、新たな才能と出会えたら、と思う。

西田留美可(舞踊評論)

【1/6 Aグループ】… •BLANKS!!『微睡、霧、seas ON off』 •三木美智代『溺れる記憶』 •ハクとオグ『水際の再会』
【1/7 Bグループ】… •浅川浩代『私がわたしをうらぎらない(決意)』 •玉内集子『それぐらい、本当にちょっとのこと』 •cyori素『うぬぼれワルツ』
【1/9 Cグループ】… •中野ちぐさ『見る場所を変えればかわるかもしれない』 •振子びじん『フルエテ!透明』 •まあさ/那由多『セワ合チ待』
【1/10 Dグループ】… •澤田有紀『キン魚。』•平田友子『work for a dialogue』•井上大輔×辻田暁『Hinata』
【1/12 Eグループ】… •マルギットさんとわたくしたち『ヘソノヲ』 •秦真紀子『4℃の時間』 •祖父江洋子『ゆうじょ』
【1/13 Fグループ】… •池田聖智子『性(さが)』 •市川まや『NUKENUKE 半分だけ本当』 •306『L⇔R』
【1/14 Gグループ】…•清藤美智子『漂う背中』 •PICK.LE『やさしい砂』 •カワムラアツノリ『グレムリン』
【1/16 Hグループ】…•林慶一『ゼニゲバ』 •shoppin'gocart『FICTIONS』•PANCHA『ARARE』
【1/17 Iグループ】… •青山るりこ『穴飽キズムズム(仮)/いれてだす』 •坂本知子『dreamless』 •Ryuzo Fukuhara『Gecko Dance - Dance of Moonlight』
【1/19 Jグループ】… •mints:choco『ホクホクのくちづけ』 •ナンセンス『untitled』 •井手実『Me Light』
【1/20 Kグループ】… •関かおり・木村美那子『だんだら』 •Cherry's noise『▲tento▲』 •ココ●テン『おもうきょり』
【1/21 Lグループ】… •Akoatik『U+I』 •川上暁子『irony』 •山縣美礼『dementia praecox - Where is the child I was, still inside me or gone?』

*schedule for December 2006*

### TINY ALICE / NPO ARC

新宿区新宿2-13-6 光亜ビルB1 tel&fax 03-3354-7307
http://www.tinyalice.net tokyo@tinyalice.ne.jp

1月19日(金)~1月21日(日)■Al-Kassab and his group Mustaheel-Alice fromバクダッド「Dream in Baghdad」ALICE FES参加作品 1/20レクチャー有り「The Aesthetics of the Show in Picture Drama―見ることの美学」
☆会場…アサヒアートスクエア(アサヒスーパードライホール4F)東京都墨田区吾妻橋1-23-1 ☆予約・問合せ…タイニイアリス/03--3354-7307 090-7267-3363 tokyo@tinyalice.net ◎フセイン政権崩壊後も民間人の死者、日に平均36人などと報じられているイラク。その首都バクダッドからまた同時代演劇がやってくる!!「イラクから、船乗りたちのメッセージ」(2004)、「バクダッドのオテロ―僕たちには時間がない」(2006)に続く第三作は「バクダッドの夢」。セノグラフィ演劇の理論家でもある中東屈指の演出家S.アルカサーブと、そのグループ・ムスタヒールアリス(しかめっつらのアリス)の、目で見るピクチュア演劇のなかに平和への願いが静かにそして熱く……。

### 麻布 die pratze

〒106-0044 港区東麻布1-26-6-2F T&F 03-5545-1385

12/22(金)~12/24(日)■舞踏―極私空間 吉本大輔舞踏公演'06『エロスとタナトス』
問=044-932-2039(舞踏極私空間) ☆原作=スタニスラフ・ドゥ・ガラ咀嚼公夫人 ☆出演=吉本大輔 ◎酷暑のローマで涼みに入った人気のない教会。そのひんやりとした物陰にベルニーニ作の聖女テレージアはいた。その恍惚と喜悦の表情に魅せられてすでに20年・・・

12/27(水)~12/28(木)■ねねむ
『US-SO ~森の巷の上の方へ~』 問=090-1836-0604
☆演出=陽茂弥 ☆出演=陽茂弥 他 ◎ワークショップ形式で作られた、様々なコミュニケーションの可能性をダンスとして表現する。個性的な人々の日常の一コマ。視点を変えれば普通が普通じゃない。
1/4(木)~1/8(月・祝)■青果鹿
『がめつい奴』 問=03-5486-4005 ☆作=菊田一夫 ☆演出=八木澤賢 ☆出演=犬塚浩敏 松原直樹 今井由香利 成田ゆきよ 秋定里梦 鯨井智充 ◎2007年正月、故・菊田一夫の昭和の大ヒット作に、演出・八木澤賢がその独特のセンスで挑む。
1/10(木)~1/14(日)■KIRA'S CABARET
『カルテット』 問=047-363-8255 ☆作=H・ミュラー ☆訳=渡辺守章 ☆演出=青山吉良 ☆出演=青山吉良 菅原顕一 ◎18世紀と20世紀の両世紀末にド・ラクロが放ち、ハイナー・ミュラーが仕掛けた「危険な遊戯」が21世紀、ジェンダーを越えて蘇る。
1/19(金)~1/21(日)■Full volume Factory
『よみびとしらず』 問=080-5505-8459(スタジオアクロス) ☆作=哉村蒼樹 ☆演出=富樫勘九郎 ☆出演=山本恵太郎 平田絵里子(アクセント) 伊東友也(ZOQu) 他 ◎時は幕末。心を殺された暗殺者、鬼六と、心を殺さねばならなかった男達、新撰組。時代の狭間で2つの鬼がぶつかりあう…。
1/23(火)&1/24(水)■インターナショナル・セカンダリー・スクール「Quad (クワッド)」「Catastrophe(カタストロフィ)」「The Lesson and the ISS Music Ensemble(『授業』ISS ミュージック アンサンブル)」 問=03-5730-1331(インターナショナル・セカンダリー・スクール) ☆作=「クワッド」「カタストロフィ」:サミュエル・ベケット 「授業」:ウージェーヌ・イヨネスコ ☆演出=ショーン・ハッチンソン ☆音楽=アンソニー・フラック ☆出演=インターナショナル・セカンダリー・スクール ◎港区のインターナショナルスクールの学生(中高生)による不条理演劇を独自の音楽パフォーマンスと共にお楽しみ下さい。
1/27(土)~1/28(日)■Ko&Edge Co.
「"Experimental Body" vol.Ⅳ「D膜」」
問=03-3275-0220(魁文舎) ☆構成・演出・出演=室伏鴻 ☆出演=室伏鴻 目黒大路 鈴木ユキオ 林貞之 ◎Ko&Edgeの実験シリーズ第4弾。『D膜』 '虚実皮膜'の奇ッ界踊る境界なき境界 読んで字の如し 見て膜の如し

### 神楽坂 die pratze

〒162-0812 新宿区西五軒町2-12 T&F 03-3235-7990

12/21(木)~12/24(日)■少年かしこ
「少年かしこvol.5「オーディション会場ココ↑↓」」
問=080-3483-4382 ☆作・演出=わしみさわ よしつぐ ☆出演=友田安伊子 斉藤麻英子(殿様ランチ) かめやすき 他 ◎偶然その場所に集ってきた男女9人。突如流れる不気味なアナウンスに導かれ、謎のオーディションが今始まろうとしていた!待望のナンセンスサスペンス第二弾!
12/27&12/28(木)■DOUBT
『神楽坂 de DOUBTだよ'06』問=http://www.geicities.jp/doubt0312 ☆演出=巴菁子 ☆出演=太田哲治 宮田千穂里 関山美沙紀 内野恵理子 新田菱香 川野剛稔 他 ◎私たちはDOUBTという集団です。毎年末に無料で公演を行っています。これまでオムニバスの芝居をやってきましたが、今年は初めて一本の台本に挑戦します。
12/29(金)■林慶一☆中西レモン
「揆器千字文」林慶一・「もがき絵詞・肉色パンツ物語」中西レモン
問=linremo@hotmail.co.jp ☆作・出演=林慶一 中西レモン ☆音響=齋藤瑠璃子 ☆照明=三枝淳 ◎自らを揆器民族と称する林慶一と、何をやっているのか分からない人・中西レモンの新人二人によるソロ二題。自称日本三大迷演・歳末見るっきゃナイト☆
1/6(土)~1/21(日)■ダンスがみたい!「新人シリーズ5」
詳細、上記参照。
1/22(月)~1/24(水)■笛田宇一郎事務所
「激しく待ち焦がれながら/悪こそは未来」 問=03-3844-9124(笛田宇一郎事務所) ☆演出=笛田宇一郎 ☆出演=花佐和子 笛田宇一郎 ◎ハイナー・ミュラーの「ハムレット・マシーン」を基に、演劇の歴史と私たちの現在とが交錯する地点をたち上げよう。「現代演劇」の可能性を開拓できるなら。
1/29(月)&1/30(火)■薔薇絵
「薔薇絵ダンスパフォーマンス「人形譚」」問=03-3235-7990(神楽坂die pratze) ☆作=薔薇絵 ☆美術・灯り=呂師 ☆出演=薔薇絵 ◎異端のアーティスト ハンス・ベルメールの作品から啓示を受けた。今日の舞台の音は伝説のロックバンドOnna(宮西計三のバンド)が担当する。

*schedule for December 2006*